

第 12 回がんワクチン療法研究会学術集会開催にあたって



総会会長 小池 直人
聖隷佐倉市民病院 外科

このたび第 12 回がんワクチン療法研究会学術集会を開催させていただくことになり、大変光栄に存じます。本研究会の役員の方、また、運営にご尽力されてきた皆様に、心より感謝申し上げます。

さて、がん治療の 3 本柱は外科治療、抗癌剤治療、放射線治療であります。そして、本研究会で扱っているような免疫療法は第 4 の柱とされています。末期に近い進行癌を一つの治療法で治すことは困難です。自分は筑波大学消化器外科研修医時代、外科の師匠でありました轟健先生から、細胞培養の勉強のため、当時つくばの理化学研究所細胞開発銀行室長でありました大野忠夫先生を紹介していただき、そのご縁でおよそ 10 年前から自家腫瘍ワクチンに携わるようになりました。轟先生は消化器外科の分野で難治性と言われております肝胆膵の悪性腫瘍の治療に取り組んでおりましたが、自分も今のこの難治性腫瘍の治療を行っております。難治性腫瘍は切除ができたとしても勿論それだけで根治させることは困難で、免疫療法を含めた集学的治療が必要です。脳神経外科の分野では既に、難治性と言われております膠芽腫に対して自家腫瘍ワクチンを加えた集学的治療の臨床研究が着々と進んでおり、その効果がこの研究会で毎年発表されております。

しかしながら、がんワクチンなどの従来の免疫療法は、副作用がない理想的な治療法である反面、自己の免疫制御機構の存在でその効果には限界があることがわかって参りました。この数年の間に PD-1 や CTLA-4 に対する抗体療法といった、その問題点を逆手に取った免疫チェックポイントを阻害するような治療法や、改変 T 細胞移注療法が、一部のがんにおいて大きな効果を有し、現在その研究開発が競争状態になっております。しかし、この免疫チェックポイント阻害剤や、改変 T 細胞移注療法は正常組織にも広く分布している分子をも攻撃

するため、免疫療法の最大の利点である「副作用が極めて軽微であること」が犠牲となっております。このような形で進化するがん免疫療法の中で、自家腫瘍ワクチンなどのがんワクチン療法が今後どのような役割を担って行くかを検討することを目的として、本学術集会は「がん免疫療法の中でのがんワクチンの役割」というテーマとさせていただきました。

今回の学術集会では特別講演として札幌医大名誉教授佐藤昇志先生より、ヒトがん幹細胞を標的としたゼロ副作用を目指したワクチンのご講演を賜ることを予定しております。また、善光純子先生からは免疫治療に関する基礎的検討、衛藤展功先生からは伴侶動物に対する自家腫瘍ワクチンと抗癌剤との併用に関する演題、竹越國夫先生、山口透先生、倉西文仁先生、丸山隆志先生、三好立先生からは自家腫瘍ワクチンと抗癌剤、放射線治療、免疫チェックポイント阻害剤などとの併用に関する興味ある演題、石川栄一先生からは自家腫瘍ワクチン施行後の再発様式に関する演題、研究会会長の村垣善浩先生、千葉大学外科の阿久津泰典先生、横浜市立大学外科の澤田雄先生からはがんワクチンの臨床試験に関する演題をいただいております。これまでの研究会同様、じっくり討論できるよう十分時間を確保し、今回のテーマの目標に向かう実りのある集会になるように努力したいと思います。是非、皆様のご参加をお待ちするとともに、良き研鑽の場となりますよう期待しております。